

令和 3 年 6 月 25 日現在

機関番号：11301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2020

課題番号：18K00029

研究課題名(和文)「技・術・芸」の階梯性に立脚した「技術」の考察

研究課題名(英文) A study of "technology" based on the ladder structure of "skill, acquirement, and art"

研究代表者

戸島 貴代志 (Kiyoshi, Toshima)

東北大学・文学研究科・教授

研究者番号：90270256

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、上代から存在する「技、術、芸」という三位一体的な概念の階梯性について、「芸を技でこなす術」という世阿弥の芸能論における輻輳的階梯性、将棋や武術などにみられる「技から術、術から芸へ」という発展的階梯性、の二つの側面から解明し、これを踏まえて、「技、術、芸」のこれら多面的な階梯性と日本的職工世界の特性的関係を技術倫理的観点から解明した。「技」から「術」へ、そして「術」から「芸」へという段階的価値観に沿ういわゆる「ものづくり」世界を芸道観に基づく「芸を技でこなす術」という視点から再構成し、「術」概念を中心にして日本の職人的技術と科学技術との違いを学際的に考察した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、日本古来の「技・術・芸」という概念を軸にして、日本的職工世界の特性を日常生活用具(たとえば和紙や漆器など)の製造の側面から明らかに、それをもとに、「技」から「術」へ、そして「術」から「芸」へという段階的価値観に沿って、いわゆるものづくり世界を技術倫理的視点から攻究することを目的とするものであった。したがって本研究は、連携研究として日本文学や心理学の視点も加味するしかたで、日本の全国各地に見られる職工世界と地球的規模における科学技術的世界との違いを考察し、洋の東西を超えた今後のあるべき技術世界の可能性を提唱できたと考える。

研究成果の概要(英文)： This study elucidates the ladder structure of the three-way concept of "skill, acquirement, and art" from two aspects: (1) the congested ladder in Zeami's theory of performing arts, and (2) the development ladder of "from skill to acquirement, from acquirement to art", which is seen in shogi and martial arts, etc. The relationship between these multifaceted ladders and the characteristics of the Japanese professional world is elucidated from a technical and ethical point of view. Based on this research, we will reconstruct the so-called "monozukuri" world, which is in line with the gradual values of "skill" to "acquirement" and from "acquirement" to "art", from the viewpoint of "the art of performing art."

研究分野：哲学

キーワード：技・術・芸 世阿弥 効率

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

## 1. 研究開始当初の背景

将棋や武術などでいわれる「技、術、芸」の上昇的な階梯性については以前から関心があったが、研究代表者在住の宮城県のこけしの製造現場を見聞した際に、日本のものづくり世界においても同様の「技・術・芸」の階梯が存在するのではないかと考えるようになった。また、ベルクソンやハイデガーの「技術論」を研究するにつれて、上記の「技、術、芸」という視点に立って、技でも術でもない技 - 術という立場からテクノロジーの世界的普遍性を特徴づけることができるのではないかと、との着想を得るに至った。

日本の民俗現象を踏まえて世界的科学技術と日本の職工世界とを比較するこのような研究について、歴史的土着的固有世界と地球的技術的共通世界との相克の事例報告としてなら『苦海浄土』(石牟礼道子、講談社、1972)に代表される一連の水俣研究が先駆的業績の一つと考えることができる。そこでは、水俣に暮らす人々の伝統的土着的の世界と、チッソ工場に代表される非土着的技術世界との対比が、後者による前者の圧殺という仕方で描かれている。本研究では、職工世界に定位するに際し、その伝統的土着性に着眼しつつも、この水俣研究に代表されるような技術世界との衝突・相克といった方面にはなく、個々の土着的な職工世界と科学技術との間における共通性や相互補完性のほうに焦点を当てるつもりであるが、その場合、現代技術の本質を二千年以上のタイムスパンで捉えるハイデガーの技術論、および、かかる本質を数十億年の生命進化のタイムスパンで捉えるベルクソンの技術論等が、原理的な視点からの技術の解明のための思想的背景となっている。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、上代から存在する「技、術、芸」という三位一体的な概念の階梯性について、「芸を技でこなす術」という世阿弥の芸能論における輻輳的階梯性、将棋や武術などにみられる「技から術、術から芸へ」という発展的階梯性、の二つの側面から解明し、これを踏まえて、「技、術、芸」のこれら多面的な階梯性と日本的職工世界の特性の関係を技術倫理的観点から解明することである。またそれをもとに本研究では、「技」から「術」へ、そして「術」から「芸」へという段階的価値観に沿ういわゆる「ものづくり」世界を、芸道観に基づく「芸を技でこなす術」という視点から再構成する。その際、日本文学的見地からする世阿弥芸能論や心理学的見地からする勝敗心理との連携も考慮しつつ、「術」概念を中心にして日本の職工世界の性質を解明することを通して、職人的技術と科学技術との違いを学際的に考察する。

## 3. 研究の方法

本研究では、芸能論および技術倫理の複合的考察によって、土着の世界あるいは日本

的職工世界を貫く中心的特徴を「技・術・芸」という概念を軸足にする仕方で捉え、そこから、安易な自然回帰や素朴な懐古趣味に陥らない日本独自の文化的特性を活かした技術観が獲得できるところまで研究を進めるが、その際、日本文学的見地から見た技・術・芸の思想的側面である世阿弥の芸能論と、心理学的見地から見た術や芸における人間精神の特徴づけとも連携することによって、日本独自の技術観の多元性を学際的に説明することを主たる方法とする。

なお、本研究における具体的方法は以下ようになる。

#### **現場観察・資料収集に関して**

和紙、漆器、葛、こけしの製造工程の現地見聞および資料館等での資料収集（場所は福島、岐阜、福岡、石川、富山、愛知）、また補足として、染色や仏像の制作工程の現地見聞および資料館等での資料収集を通して（場所は京都）、職人的技術世界における「技、術、芸」の階梯性の有無とその意義の確認をする。その際、将棋や武術における「技、術、芸」と世阿弥のいうその二つの階梯性それぞれについて確認する。

#### **文献的・理論的根拠付けに関して**

「技、術、芸」の階梯性の事実確認と哲学的・現象学的考察および基礎文献研究、また技と芸とに挟まれる「術」の移行的性格に関する民俗学的文献研究と理論的考察とを通して、日本の職人的技術世界の特異性を明確化する。

#### **理論的総括として**

現代科学技術の本質に関する哲学的研究（ハイデガー、ベルクソン、デリダ等）を基礎にして、連携研究者（心理学、日本文学）からみた「技・術・芸」の視点も加味しつつ、土着的歴史的固有世界と地球的普遍的共通空間の異同を技術倫理的視点から説明する。

## **4. 研究成果**

将棋や武道などでは「技・術・芸」という一種の上達過程があるといわれる。武道やスポーツの例でもわかるように、一般に技は相手の一部に、術は相手の全体に対してかけられる。これをかける側から言うなら、技においては自分の一部が、術においては自分のある種の全体（精神性も含めた全人格性）がそれぞれ発動しているといえる（たとえば足技、寝技等、あるいは忍術、催眠術、医術、柔術等）。これら技・術に対して芸では、「名人芸の域に達している」といわれるごとく、将棋ならば指し手の美しさが、そして勝負事でも一連の動きの美しさや端正さなどが重要とされる。この場合はもはや結果としての勝ち負けそのものが、場合によれば勝負相手の存否さえもが副次的なものになってくる。すなわち、技でも術でも、当の技や術という行為がいかなる結果（効果、成果）を生むかが関心の的となっているのに対し、勝敗の結果はおろか勝負相手の存否をさえ問わぬ芸においてはもはやこの種の関心は薄れ、自分の行為自体が目指されるべき目標となる。これが「技 術 芸」という発達的あるいは

上昇的階梯性のさしあたりの特徴である。

また「技、術、芸」については、世阿弥のいう「芸を技でこなす術」という思想にも一種の階梯性がみられる。世阿弥の芸能論にいわれる「誠の花」は、老境において身体的に制約をうけてもなおみずからの「芸を技でこなす術」を得ようとするところに咲く「花」である。さらに「秘すれば花」といわれるように、この「芸を技でこなす術」はいわゆる秘術であり、その意味でここでの「術」は役に没入する自然体でもなく、しかしまた客への効果を狙った計算でもない。むしろそれら自然体と計算の両方の要素をこの秘術としての「術」は含んでいる。本研究では、ここにみられる「技、術、芸」の階梯性が、上述の将棋や武道の場合とは違って、「技」も「術」も「芸」それぞれが入れ子構造をなす一種の輻輳的な階梯性となっている点を解明した。

さらに本研究において、将棋や武道における「技 術 芸」における上昇過程では行為自体が目的となることが目指されるという点、それに伴って行為主体と対象との全体性が目指されるという点が解明された。しかしこの上昇の動向は常に逆の動向も伴っている。すなわち、行為主体は、ともすれば己と対象とを分け、行為の局所的効果を狙う方向へと向かいがちである。このことから、「技」「術」「芸」三者の中間に位置する「術」は、「技」のほうへと向かう方向も、「芸」のほうへと向かう方向も、すなわちより全体性を獲得する方向も、より局所性を追求する方向も、共に可能性として含んでいる、ということが考えられる。この点では将棋や武道における「術」は、世阿弥のいう「術」のもつ多元性、すなわち役に没入する純粹さと客への効果を狙った計算という二つの要素をともに有していることにも通じている。

このような「術」の多元性、輻輳性、あるいは多方向性・開放性を、我々は、柳田國男の俗信研究における「兆・応・禁・呪」といったカテゴリーからもヒントを得ている。彼は「呪」と「術」との語源的同一性を主張したうえで、この「呪」の事後的効率性といった実践的性格を強調している（『柳田國男全集』第28巻、筑摩文庫、1989）。これに対して我々は、技から術、術から芸、というこの方向は、実はその逆の方向へと常に我々を誘う日常的利便性への抵抗として、上代から人々にとっての一種の教訓ともなっていた、と考える（このことを本研究では和紙や漆器などの製造過程で具体的に確かめた）。歴史の辿った方向は、ものごとを全体的に把握するというよりは、これを部分に分け局所化して処理するという方向だった、ということもできるだろう。こうした我々の研究は、現場に定位した実践学（たとえば「失敗学」）に留まらず、科学技術そのものの本質の解明という哲学的課題をも負うものである。

ある職人の言葉を作家の水上勉はこう紹介している。「若者は、職人になることを嫌がって、一足飛びに芸術家になろうとします」（『越の道』河出書房、2000）。安易に芸術の世界には向かおうとしないこの職人の言葉は、技から術そして芸へと連なる一連の流れの中で、芸術ではなく「芸」の何たるかを教えているように思われる。背伸びをした青臭い作品とは違って、芸つまり職人芸を追い求める職人にとっては、

自分の制作意欲のみに任せたものづくりが行われるのではなく、あくまでも客の好みに応じたものをこつこつと作り上げるという、その意味での「需要」も常に前提されているわけである。ここでは、現代の市場主義におけるマーケティングとは異なる、物を作ることの本質に関わる独自の顧客 - 需要の地平も開けている。

我々はさらに、この芸の世界が「無駄のなさ」を追及する世界でもあることも究明した。先の将棋の場合でも、芸の域に達した名人ならできるだけ「最短」の手数で決めようとするように、我々の考える「芸」はいわゆる効率概念を排除しない。この点では、これまでの技術 = 効率、芸術 = 没効率、という枠組みには属さないものとしてこの「芸」を捉えたことが我々の研究の独創的成果ともいえる（この「無駄のなさ」というあり方も個々の製造現場で実際にかつ具体的に確認された）。

したがってここから、むしろ真の効率とは何か、という問題も芽生えてくるが、これに関しては、上に触れた「行為主体と対象との全体性」という概念を踏まえ、科学技術における効率は「局所における無駄のなさ」であり、これに対して「事の全体における無駄のなさ」があるという結論を得た。多くの場合、節約主義に向かうエコロジーに対し、地球の資源を食い尽くさんがばかりの現代技術の趨勢の意味をも考慮するという点で（ここでハイデガーやベルクソンの言説が考察される）本研究は一般のエコロジーとも一線を画する。

本研究では、芸能論および技術倫理の複合的考察によって、土着的世界あるいは日本的職工世界を貫く中心的特徴を「技・術・芸」という概念を軸足にする仕方で捉え、そこから、安易な自然回帰や素朴な懐古趣味に陥らない日本独自の文化的特性を活かした技術観が獲得できた。日本文学の見地から見た技・術・芸の思想的側面である世阿弥の芸能論と、心理学的見地から見た術や芸における人間精神の特徴づけとも連携することによって、日本独自の技術観の多元性も学際的に解明できた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 戸島貴代志	4. 巻 1
2. 論文標題 沈黙の記述	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 柳田國男と東北大学	6. 最初と最後の頁 245-267
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------